

県と徳大が医療提携

合意書締結 医師育成・派遣など



徳島県と徳島大学は16日、県立中央病院と徳島大病院が医師育成などソフト面で連携し、地域医療再生や効率的な病院運営に取り組むための合意書を締結した。隣接する両病院の地理的条件を最大限に活用する「総合メディカルゾーン」の一環で、医師不足が深刻な県南部や西部への医師派遣などの支援策も盛り込まれた。

合意内容は6項目。両病院は「二つで一つ」を児集中治療室（NICU）など周産期医療の拠点化、中央病院の小児救急医療拠点化▽がん診療の充実に向けた機能整備や県西部への医師派遣など人的支援を連携して進める。

医療品や診療材料の共同調達のほか、高額医療

機器の共同利用、24時間運営する保育所の共同運

用などにも段階的に取り組む。県庁であった締結式には、県から飯泉嘉門知事や塩谷泰一病院事業管理者、徳島大から青野敏博学長や香川征徳島大病院長らが出席。知事は「県民の安全・安心を守る医療再生の全国モデルにしたい」とあいさつ。青野学長も「大学の持つノウハウや人材を

活用し、県内の医療充実に貢献したい」と述べた。

県と徳島大は2005

年8月、総合メディカル

ゾーン構想を進めること

で合意。06年9月には、

現在改築中の中央病院と

徳島大病院を結ぶ連絡橋

の整備や駐車場の共同利

用など、ハード面で一体

化する合意書を交わして

LEDを農業活用へ

農工でも連携 22日協定

徳島大学と県は、連携して農業教育を充実させるとともに、発光ダイオード（LED）の農業への活用などについて研究を進めるため、22日、県庁で協定を結ぶ。協定

は、高度な知識を持った農業の担い手育成を目指す県が、LEDなどの最先端の研究に取り組む徳島大に呼び掛けて実現する。

計画では、来年春から徳島大工学部生物工学科3年次の教育課程に、農学系の科目が選択できる新たなカリキュラムをつくる。県立農林水産総合技術支援センターの職員が講師を務め、県特産のシイタケ、スダチ、イチ

ゴの栽培方法や病理学について学べるようにする。

共同研究も推進。LEDについては▽花の促成栽培用の照明▽殺菌装置▽漁業に使う集魚灯などへの活用法を探る。また、生物工学を応用し、農作物の遺伝子レベルでの品質向上にも取り組む。

徳島大と同支援センターが手掛けてきたイチゴの病害研究も引き続き行う。県によると、徳島は中四国で唯一、四年制大学に農学系の学部学科がないため、農学分野を目指す約100人の学生が毎年、県外の大学へ流出しているという。このため県は、県内の農業系学生の確保も期待できるとしている。